

札幌彫刻美術館友の会会報

いずみ

第20号

2007年7月1日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 20



《ブラキストン記念碑》 (函館市函館山山頂広場 高さ2.5m)

晴れた日の函館山、そこからの眺望は素晴らしい。その広場の中心に湾を背にした碑がある。《ブラキストン記念碑》だ。ブラキストンは英国の動物学者で、貿易の傍ら鳥類の研究を行い、津軽海峡に動物分布上の境界線があることを見つけて1861年に発表した。これを記念して1960年に建立されたもの。

(写真・文 仲野三郎)

「大切なことって何なのでしょうか」

道立近代美術館顧問 水上 武夫

私も含めては失礼な話だが、向学心とまでいわなくとも、誰しも向上心を内に秘めている。この向上心を持っていなければ、生きている意味もないし、世の中、前に進まない。私の場合、どっちに向かっていいのか未だに右往左往しているけれども、そして短い未来であるけれども、何がしかの向上心は燃やし尽きてはいない（と思う）。あの時、あれを始めておけばよかったとか、忍耐力に欠けるなあとか、毎日、ぶつぶつ言っているけれども、これでも何とかしたいと思いつけているのである。

しかし、つき詰めてみると、そんなに大仰なことではない。昨日より今日、少しはましな人間になりたいと考えるのが関の山である。お世話になった人の葬儀には必ず行こうとか、苦虫はかまないようにとか、もっと無口になって他人の話に耳を傾ける寛容な人間にならねばとか、忘却することを恐れず本を読もうとか—といったささやかな希望を持ち続けているのである。

大人居士、有徳な人を目ざすわけではない。仏門に入ることでもない限り無理な話だし、学んで学者になろうとも思わない。この世にはろくでもない僧侶がいるそうだし、学者がすべて人格者だという話も聞いたことがない。私の目ざす向上心は、ほんとにささやかなのである。ごくごく俗人の範囲内で我慢するしかない代物である。

要は、欲ばらず、気ばらず、希望を持ち続けられること。私には、これでも十分すぎる程かもしれない。しかし、考えてみれば、

一部の例外を除いて、どれもこれも独りでは持続不可能なことなのである。「社会」は二人以上で成り立つ。この「社会」に属さない限りは達成不能なのである。何しろ私は俗人なのだ。

その、よりより（たびたび）集まった中に入って初めて自らの向上心が活性化、積極化するのだと思う。それを私たちは希望とよんできたのだろう。私はその希望に私の短い未来を託しているのである。私の限りある未来は、限りなく明るいと確信して。

みなさんの札幌彫刻美術館友の会は、なかでも属するに足る、すぐれた「社会」である。一人一人の向上心があって会は存続したのであり、互いの刺激が向上心をさらに高めた集団になったから今も存在するのである。小遣いを出し合い、自分の時間を犠牲にしてまで、「こんなのやってられるか」と思わなかったのは、そこにそれ以上の価値を発見したからである。

聞くとところによると、会は存亡の危機にあるという。しかし、世界中、どの美術館も友の会やボランティアの活動なしに存在は難しい。みんなその強化にやっきとなっているのである。「地域密着」とか、「生涯学習」とか「市民との協同」とか、言葉だけの国は、日本だけである。

みなさんの存在は必要なのである。この機会にちょっとひと息入れて、もっと遠くに目をやってみたらどうだろうか。新しく美しい風景が見えてくるに違いない—と、思うんだけど。

「大切なことって何なのでしょうか」

道立近代美術館顧問 水上 武夫

私も含めては失礼な話だが、向学心とまでいわなくとも、誰しも向上心を内に秘めている。この向上心を持っていなければ、生きている意味もないし、世の中、前に進まない。私の場合、どっちに向かっていいのか未だに右往左往しているけれども、そして短い未来であるけれども、何がしかの向上心は燃やし尽きてはいない（と思う）。あの時、あれを始めておけばよかったとか、忍耐力に欠けるなあとか、毎日、ぶつぶつ言っているけれども、これでも何とかしたいと思いつけているのである。

しかし、つき詰めてみると、そんなに大仰なことではない。昨日より今日、少しはましな人間になりたいと考えるのが関の山である。お世話になった人の葬儀には必ず行こうとか、苦虫はかまないようにとか、もっと無口になって他人の話に耳を傾ける寛容な人間にならねばとか、忘却することを恐れず本を読もうとか—といったささやかな希望を持ち続けているのである。

大人居士、有徳な人を目ざすわけではない。仏門に入ることでもない限り無理な話だし、学んで学者になろうとも思わない。この世にはろくでもない僧侶がいるそうだし、学者がすべて人格者だという話も聞いたことがない。私の目ざす向上心は、ほんとにささやかなのである。ごくごく俗人の範囲内で我慢するしかない代物である。

要は、欲ばらず、気ばらず、希望を持ち続けられること。私には、これでも十分すぎる程かもしれない。しかし、考えてみれば、

一部の例外を除いて、どれもこれも独りでは持続不可能なことなのである。「社会」は二人以上で成り立つ。この「社会」に属さない限りは達成不能なのである。何しろ私は俗人なのだ。

その、よりより（たびたび）集まった中に入って初めて自らの向上心が活性化、積極化するのだと思う。それを私たちは希望とよんできたのだろう。私はその希望に私の短い未来を託しているのである。私の限りある未来は、限りなく明るいと思信して。

みなさんの札幌彫刻美術館友の会は、なかでも属するに足る、すぐれた「社会」である。一人一人の向上心があって会は存続したのであり、互いの刺激が向上心をさらに高めた集団になったから今も存在するのである。小遣いを出し合い、自分の時間を犠牲にしてまで、「こんなのやってられるか」と思わなかったのは、そこにそれ以上の価値を発見したからである。

聞くとところによると、会は存亡の危機にあるという。しかし、世界中、どの美術館も友の会やボランティアの活動なしに存在は難しい。みんなその強化にやっきとなっているのである。「地域密着」とか、「生涯学習」とか「市民との協同」とか、言葉だけの国は、日本だけである。

みなさんの存在は必要なのである。この機会にちょっとひと息入れて、もっと遠くに目をやってみたらどうだろうか。新しく美しい風景が見えてくるに違いない—と、思うんだけど。

夭折の画家の迫真力が生命

神田日勝記念美術館副館長 菅 訓章

十勝平野の西北端に位置し、東大雪山系を遠望する町、鹿追。札幌から車を走らすこと3時間半、国道274号線で鹿追市街に入ると広大な芝生の奥に山並みをかたどったアースグレイの建物がそびえています。それが、第二次世界大戦の終戦前夜、この地に開拓入植し、戦後洋画に一時期を画した画家、神田日勝の代表作のほぼ半数を常陳する「神田日勝記念美術館」です。

没後ほどなく詩人、宗左近に激賞され、東京の画廊、さらに地元文化団体による大規模な遺作展を経て、神田日勝の評伝作成を契機に青年文化集団が提起した記念館建設の夢。実に15年余を費やした建設運動の結実がこの美術館です。鳥居省三、橋本禮三、藤本英夫、倉田公裕、加藤多一などの文化人が期成会の招請で相次いで来町、神田芸術の魅力を語ってくれたことも挿話として残されています。

「住んでいい町こそ訪れていい町」を標榜し、あえて日勝の入植地である笹川の地に立地を求めず、市街地に広がる営林署の苗圃跡地に建設された鹿追町民ホールやトリムセンターと連動、生涯学習ゾーンを形成、住民を巻き込んだ展覧会や講演会、児童向けの事業を展開しています。施設的には狭隘さが痛感されますが、隣接施設の活用で補完しています。

この美術館の代表作は《馬》(絶筆・未完)。開館当初、《室内風景》が所蔵作品でないという悲観的な意見がありましたが、展覧会未発表の《馬》は、作風の原点回帰や、独特の描法をうかがわせる作品として、館のロゴマークにもなり、「週刊新潮」の「秘蔵の一点」を皮切りに、多くの美術図書や推

理小説等の作品に取り上げられ、今や美術館の代名詞になっています。冬季の閑散期、展示室の中央でじっと《馬》と対話して涙ぐむ観覧者も少なくありません。美術館の歩みは、《馬》の市民権が確立する歩みでもありました。

また、歴代の館長である文学者の感性が、この美術館の個性を演出していることも見逃せません。高橋揆一郎前館長は馬を描き続けた日勝の画業と開拓に果たした馬の役割を次代を担う子供たちに伝えることを主眼に「馬の絵作品展」を創設、初め十勝管内から開始された事業は翌年、北海道全域、さらに全国から1500点の応募がある文部科学大臣賞も出る特色ある事業展開になりました。また、小檜山博現館長の日勝作品の「感想文」は、鑑賞者のさまざまな思いが寄せられ、作品鑑賞に新しい視点を提供してくれると共に、感動の多様さを再認識させてくれています。

作品点数は「これだけですか」と言われるほど少ない、夭折の画家ですが、それを補って余りある迫真力が、この館の生命です。かつて「日曜美術館」で館を訪れた女優の真野響子さんが「これしかないのか、500円は高い」という入館者に接し、帰り際に「私は《人間A》と《馬》に出会えたことで元気をもらいました。500円の値の絵とは何でしょうか」といわれた言葉が、15年を経て今も僕の力になっています。15周年を来年に控え、新たな展開を期す、冬の時代の小美術館です。

神田日勝記念美術館 十勝管内鹿追町東町3丁目2、☎0156-66-1555◇開館時間：午前10時—午後5時 月曜休（祝日が重なる場合は開館）

南国の潮風に乗って出会った本郷新

吉岡 達夫 (会員)

早春の鹿児島、本郷新の話を二つ。

その一つ。朝から快晴、すでに 20 度を超える暑さ。汗を拭き拭き長い急な坂道を登り切ると、眼前にはダイナミックな錦江湾に浮かぶあの桜島がパッと姿を現す。

ここは長島美術館。鹿児島市街地が一望できる、広大な庭園に囲まれた高台にある。本館正面エントランスに進むにつれて、一際目立つ彫像がある。どこかで見たようなそんな気で近付くと、何んとタイトルは本郷新の《嵐の中の母子像》ではないか。

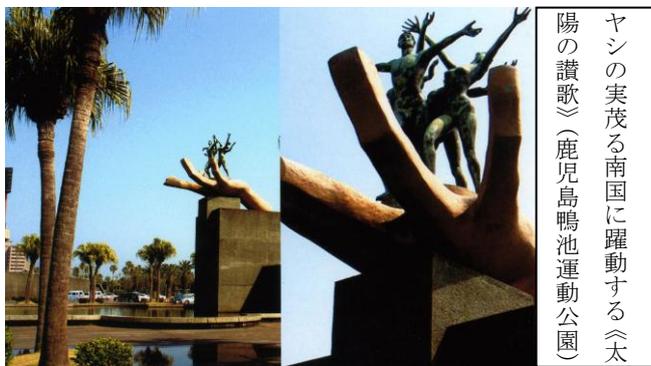
同じ作品を札幌の道立近代美術館前庭でも見ている。でもここ鹿児島で見ると北海道近美の作品とは違って見えるのである。なぜだろう。灼熱の太陽のせいかな……。



マグマのシンボル桜島に立ち向かう《嵐の中の母子像》(長島運動公園)

この作品はあの広島の大原惨事をモチーフにして深く固い愛情で結ばれた母子像を表現したものと聞く。ここではマグマのシンボル、桜島に立ち向かって突進するかのようにも見え、母親のたくましさ、緊張感、母子の固い絆が、一層強烈に感じられる。この見え方の落差が鹿児島での新しい発見だった。

もう一つ。舞台は変わって、同市の鴨池運動公園。ここには本郷新の《太陽の讃歌》が、池の前の高座に聳え立つ。1972 年、鹿児島市で開催された第 27 回国体の記念として、南国の太陽のもと明日の郷土をになう若人のはつらつとした躍動美を象徴した



ヤシの実茂る南国に躍動する《太陽の讃歌》(鹿児島鴨池運動公園)

モニュメントで、主に県民の浄財を基にして建立されたと碑文にうたう。

高さ 3 ㍎、幅 4.2 ㍎、奥行き 6.5 ㍎という金色の巨大な手の上に、男性が前後に 2 体、女性はその間の左右に 2 体、計 4 体の裸像が躍動する。南国ムードの、ヤシの実茂る広い公園で暑い太陽に向かって両手を大きく広げたポーズは天上に飛翔するごとく。

この 4 体のうち女性 2 体の裸像は札幌市中央区北 1 条の北海道文化放送前に対で設置されている《躍進・讃歌》と同じ作品だ。

《太陽の讃歌》の一部の 2 体とはいえ、一つ一つ見てもなかなか同じに見えてこないのが不思議だ。同じ作品でも所や背景、季節や時間などで変貌するのが、野外彫刻の大きな魅力の一つかも知れない。

「野外彫刻と街なかの美を守ろう」をテーマに開催

2007年5月19日(土) 札幌市市長公館



シンポジウム出席者(敬称略)

橋本 信夫(札幌彫刻美術館友の会会長)

佐々木けいし(道教育大准教授)

桑原 昭子(北のくらし研究室事務局長)

松原 安男(札幌芸術の森野外美術館

作品解説ボランティア)

吉田 一雄(札幌市観光文化局文化都市市民文化課長)

司会 高橋淑子(友の会会員)

「野外彫刻と街なかの美を守ろう」をテーマにした友の会のシンポジウムは平成19年度総会に引き続いて5月19日、会員はじめ60人あまりが参加して札幌市中央区の札幌市長公館で行われた。冒頭、友の会が制作、この春完成したビデオ「野外彫刻と街なかの美を守ろう」を鑑賞したあと、5人のパネリストがそれぞれの立場から野外彫刻のあり方について提言した。

橋本会長「長期的な展望が必要」

基調講演として友の会の橋本信夫会長は野外彫刻の現状について、「彫刻についてのまとまった資料がない。戸籍がないためだが、どういう理由で作成したのか分からないものもあり、維持管理ができていないケースが多いこ

とから汚れや破損が目立ち問題化している」と指摘、「汚れた彫刻を誰でも拭きたくなるようなマニュアルが必要で、長期的展望の中で取り組まなければならない」と訴えた。

佐々木氏「彫刻の敷居を低く」

道教育大金属工芸研究室准教授の佐々木けいし氏は金属工芸を専門にしている彫刻家の立場からとして「彫刻作家は作ることで精一杯でメンテナンス作業はやれない。パブリックアーツではメンテナンスはクライアントに伝えることが必要ではないか。同時に作品を長く保

つにはどうするか考える責任もあるのではないか。彫刻家はもっと勉強しなければならない」と述べ、「地域起しに使われる彫刻作品はもっと敷居を低くし、作品に自由に触れられるようにすべきではないか」という。

桑原氏「彫刻清掃に満足感」

また、北のくらし研究所事務局長の桑原昭子氏は洞爺湖畔の彫刻清掃作業に参加した

体験を踏まえて「清掃を通じて彫刻との出会いに満足した。設置者、管理者を一本化して連

係プレーで清掃作業ができるようにしてはどうか。美術愛好の高校生、シニアの参加者を募

松原氏「美術館をメンテ・センターに」

さらに、札幌芸術の森野外美術館の解説ボランティアを務める松原安男氏は作品を制作した作家の熱意が、作品を設置したことで終わってしまいがちになっている不幸な作品がある。半面、子供たちの滑り台になっている札幌・大通公園のイサム・ノグチの「ブラックスライドマントラ」や管理の行き届いた幸せな作品の例など

吉田氏「彫刻に関心低い札幌市民」

一方、野外彫刻を管理する行政の立場から参加した札幌市観光文化局の市民文化課長の吉田一雄氏は今冬のさつぽろ雪まつりでの野外彫刻に対する市民の反応などについて、「会場にある彫刻に目を向ける市民は少ない

るなどボランティア活動で展開できるのではないかな。地域起こしにもなる」と提案した。

を挙げながら、札幌のモエレファンクラブの活動、芸術の森の管理体制、旭川で活動している旭川彫刻サポート隊の活動ぶりを報告した。その上で、「札幌彫刻美術館は全道の彫刻のメンテナンスセンターの拠点となるべきではないか」と話した。

ように思う。行政の立場は、市民の一番多い考えをもとにやらなければならない。世論、議会の動向にもよるが、財政の問題も大きい」と苦しい立場を説明した。

平成 19 年度友の会総会

新役員、2委員会設置などを可決

平成 19 年度札幌彫刻美術館友の会の総会が 5 月 19 日午前 11 時から、札幌市中央区の札幌市長公館で開かれた。

総会には会員 54 人が出席、橋本信夫会長は「3 月末で財団法人札幌彫刻美術館が解散し、札幌市と芸術文化財団の運営に変わったが、名称が変わろうとも彫刻美術館がある限り、友の会はこれまで通り、会則に則って時代を先取りした活動を展開していきたい」とあいさつした。

続いて平成 18 年度事業報告、同決算・監査報告、19 年度事業計画案、予算案、役員選出を原案通り可決した。さらに橋本会長から①会則変更見直しのための委員会設置②野外彫刻解説のための研修システム構築委員会設置の提案があり、提案どおり設置を可決して閉会した。新年度事業では会員研修として北海道開拓の村、江別、千歳周辺の日帰り研修などの実施が決まった。新役員は別表の通り。

平成 19 年度友の会役員

(敬称略)

会 長 橋本 信夫

副会長 斎藤美年子

仲野 三郎

幹 事

高橋 淑子 太田 市子

大内 和 田中 和子

大地 淳 吉田 修子

鈴木 敏明 吉岡 達夫

長峯 慰子 馬場 房子

松原 安男 佐々木保枝

岡本 憲子 濱 久子

桑原 昭子 高津多香子

大竹 明子

抜海の目

視点を変えれば見えてくる

3月のまだ雪深い中旬、氷瀑まっりの広告につられて層雲峡に旅をした。帰路いつも立ち寄る旭川の美術館で、思いがけずいい企画の展覧会に出会ったのでご紹介したい。

場所は中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館。ここは中川の作品を核にした美術館で、今は隔年になったが中原悌二郎賞の優秀作品を収蔵している美術館として知られている。また、縁あって山内壮夫や砂沢ビッキの作品も所蔵している。その数は彫刻・絵画合わせて1100点。

訪れると、「収蔵品展～彫刻（りったい）絵本3 ゆめいろの花」という展覧会を開催中。この展覧会の特色は、まず物語を作り、収蔵品の中からその物語に登場する人や物事に合った作品を選んで展示し、お客さんは物語を読みながら作品を鑑賞するという方法だ。コンセプトは「美術鑑賞はとかく作品の意味や作家の意図といったことを意識しがちだが、物語と重ねて作品を見ていくと別の面の作品の持つ形の面白さや作品の魅力を見つけることができる」というものだ。

今回の「ゆめいろの花」は、男の子がお母さんの誕生日にきれいな花を摘んでプレゼントしようとして湖に出かけ、幻想的な世界をさまようという話だ。

使われた作品は立体8点、平面8点で、

立体の作家は山内壮夫、建畠覚造、鈴木実、福岡道雄、富松考侑、篠田守男の各1点と保井智貴の2点。平面の絵画は山内壮夫、掛井五郎の各3点と藤川叢三の2作品。これらが物語の展開につれて展示されている。山内、掛井、藤川と言え、展示は当然、彫刻と思うが、絵とは、と驚いた。さらには、物語を追って作品を見て行くと、見たことのある作品もまた違って見えてくるから不思議だ。

物語を作り、そのイメージに合った作品を選ぶ、時には作品に合わせて物語を作り直さなければならないだろう。何とかして喜ばれる展示がしたい、美術館の苦労は大変だったことだろう。感想は正直言って、「あ、こんな見方もあったんだな」と面白かった。別の面から言うと、今までは何か肩肘張って見ていたものがあったなど反省もさせられた。

そして、これは私の悪い癖だが、欲が出る。よく、彫刻家と画家のデッサンは違うと言われるが、どういう風に違うのだろう。こうした機会に教えてほしいと思った。

このような展示は今回で3年、3回目とか。どこでも苦しむ入館者減の対策の一つとして、小中学生が美に触れるのに最適だし、今までとは違った鑑賞方法として、リピーター増も期待できる。次回も楽しい展覧会である。

野外彫刻清掃活動で「街なかの美を守ろう」アピール

宮の森地区(5月9日)と大通公園(6月16日)延べ 60 人参加

「街なかの美を守ろう」を合言葉に昨年からは野外彫刻の清掃活動に力を入れている友の会は今年も地域住民などを巻き込んで5月、6月と相次いで中央区宮の森、大通公園で彫刻の清掃を行い、通りがかりの市民などにアピールした。

宮の森地区 《鳥を抱く女》もすっきり

本郷新の作品が数多くある宮の森地区での彫刻清掃は5月9日、宮の森まちづくりセンターを中心に行われた。会員をはじめ地域住民らが参加して、《鳥を抱く女》《太陽の母子像》《奏でる女》などの汚れた彫刻を約2時間かけて洗い流した。地域の参加者たちは「見慣れた彫刻でも、きれいになると見る目も変わってくるようだ」と満足した様子だった。

大通公園 観光客が足を止め「ご苦労様」

6月16日には中心部の大通公園に集まり、山内壮夫の《花の母子像》など6点を清掃した。

この日は「ラブアース・クリーンアップ in 北海道」を展開している北海道市民環境ネットワーク（きたネット）の呼びかけもあって会員以外の一般参加も含め、約30人が彫刻清掃に挑戦した。まず、橋本信夫会長が「顔を背けたくなるような像の汚れが目立つ。美人は美人のようにして観賞してもらい、国際観光都市としてのもてなしができるように、自分たちの町を自分たちできれいにしよう」とあいさつ。さらに、作業に先立って道立近代美術館協力会ボランティアの前田千恵子さんが、この日清掃する《花の母子像》ほか佐藤忠良《開拓の母の像》、峯孝《牧童》、坂坦道《石川啄木歌碑》、山田良定《湖風》、本郷新《泉の像》の各作品を巡って解説した。

このあと参加者は各像に分散、手分けをしながら水洗いをし、雑巾やブラシで像にこびりついた汚れを丹念に落とした。最後にワックスをかけて磨き上げると、どの彫刻も輝きを取り戻し、さんさんと降りそそぐ初夏の太陽の光に輝いた。

作業の間には通りかかった市民や観光客が「ご苦労様です」「いつも汚れが気になっていたのですが、きれいになりましたね」などと声をかけて参加者たちの労をねぎらうなど、市民へのアピール効果も十分だった。



汚れた彫刻もたちまちさっぱりした
たたずまいに

「花王」の市民活動助成事業に応募

詳細な友の会活動を提出

友の会は今年5月に花王が公募した「花王・コミュニティミュージアム・プログラム 2007」に応募した。このプログラムは石鹸や化粧品などで知られる花王が地域に根ざしたミュージアムを拠点にした市民活動に助成を行う事業で、審査に通れば一年間に50万円を限度に資金助成するもの。友の会の活動が同助成事業に該当すると推測があり、橋本会長がA4判7ページにわたる詳細な友の会の活動状況を書き上げて提出した。この秋までに審査結果が決まる予定。

橋本会長 FM放送に出演！

橋本信夫友の会会長が6月14日放送の地域FM放送「ラジオカロス」の番組、「山鼻、あしたもいい天気」に出演した。

橋本会長は番組の中で、彫刻との出会いや友の会が取り組んでいる「街なかの美を守ろう」キャンペーンなど、友の会の活動について熱っぽく語るとともに、豊富な体験を交えての彫刻に対する熱い思いをうんちくを傾けて話していた。

次回作は「彫刻のできるまで」

友の会作成ビデオのテーマ決まる

05年から毎年手がけている友の会のビデオ編集の今年度のテーマが「彫刻のできるまで」(仮題)に決まった。意外と知られていない彫刻のできるまでの制作過程を分かりやすく紹介する作品に挑戦する。シナリオ作りなどはこれからだが、実際に彫刻作家のブロンズ鑄造現場も取材する予定。

これまでは札幌市生涯学習振興財団の委

託を受けて制作していたが、ことしは同財団の委託がなくても自主的に制作し、DVDに仕上げ、会員の研修などに利用する考え。

友の会バスツアーは8月1日

今年度の総会で決まった研修事業の中で芸術の森のバスを利用してのバスツアーの実施要領がほぼ固まった。

ツアーは8月1日(水)に行き、午前9時30分、道立近代美術館集合。同館で開催中の「ダリ展 創造する多面体」を鑑賞したあと、バスで芸術の森へ移動、昼食後、芸術の森美術館で開催している「モディリアーニと妻ジャンヌの物語展」を見る。さらに、橋本会長が寄贈したアフリカの仮面を展示した「アフリカの仮面と彫像展」も観賞する。終了後、再びバスで札幌市役所前にもどり、午後4時40分、解散予定。

<編集後記>

▼大通公園で行われた野外彫刻の清掃に初めて参加した。水を流して汚れを落とし、ワックスをかけ、最後にからぶきをすると彫刻が一段と輝きを増した。息を吹き返したような彫刻の清新さが感動的だった。光り輝く彫刻が美しく、一層、まぶしく見えた。

▼下の奥付の中にこれまで記載していた友の会の所在地がない。美術館側から友の会事務局の所在地を美術館にしないようにとの通告があったからだ。何となく根無し草のような形で、収まりがつかない感じた。次号には堂々と会の所在地を記載できるようにすることを期待したい。(大内)

札幌彫刻美術館友の会 会報「いずみ」No.20
2007年7月1日発行
発行人 橋本 信夫
編集スタッフ 斎藤美年子：011-643-7246
大内 和：011-884-6025